

「達成感」を得られるケアとは 脳性麻痺の特性に着目したとりくみ

18CC21 山田竜太郎

I. はじめに

脳性麻痺とは母親のお腹にいる間から、生後 4 週間までの間に発生した脳への損傷によって引き起こされる運動機能の障害である¹⁾。介護実習Ⅲで担当させていただいた A 様は、脳性麻痺で片麻痺、中度知的障害があるかたであった。実習では右手をつかったレクリエーションを実施し、興味を持ち実施できたものと難しいものがあった。

ここでは、介護実習Ⅲの取り組みを振り返り、脳性麻痺の方の特性に合わせた「達成感」を得られるケアを考えていく。

II. 実習先種別・実習期間

障害者支援施設

2019年6月24日～7月23日（うち23日間）

III. 事例紹介

- ・ A 様 70 歳代 女性
- ・ 気分の浮き沈みが激しい（調子の良いときは穏やか）
- ・ 脳性麻痺、左上肢機能障害、中度知的障害を患っている
- ・ 車椅子使用、自走される。食堂や廊下を散歩される。居室から食堂までの廊下の床に方向案内が設置されている。

IV. 介護の実際

1. 課題の発見と分析

物事を最後までやり遂げ達成感を得ること

気分の浮き沈みを少なくし、気持ちの安定につながる

2. 介護上の課題

気分の状態を悪化させない支援のタイミングを計る必要がある

3. 介護目標

長期目標：日常生活の中に喜びを見いだすことができる

短期目標：右手を使って楽しい時間を過ごすことができる

1. 気分の状況、1日のスケジュールを確認する
2. 右手を使ってできるレクリエーションを行う

V. 実施及び結果

A様の居室でレクリエーションを行った。魚の絵札カードでは、真剣な表情で、頭と尻尾を探し、指を指し答えた。動物の塗り絵では、リスのページを塗り始め、塗り終えたときに、できたことを伝えた。他の動物のページも見ていくが、「難しいですね」と言い、塗り絵を終了した。「難しい」といった理由を伺うと、「様々な色を使わなければいけない」と言い、判断に困っている様子であった。魚の絵札カードでは真剣な表情で取り組まれていたことから、このレクリエーションへの集中力の表れであると気付いた。

VI. 考察

穂山（2015）は、「脳性麻痺を患われている方には、感覚の受け取り方に偏りがあり、（中略）自分の運動の結果としてのフィードバックが噛み合わない体験もよくする。」²⁾と述べている。

脳性麻痺の方が達成感を得られるケアとは、介助者がその人にニーズに対応した身体部位の活性化につながる支援を行うことで、その人自身がそれらに対して好奇心を持って取り組められるような成果が出るケアであると考えた。

今回のA様に右手を使って楽しんで頂くレクリエーションを実施してみて、少しでも、自身の動かせる右手を使って好奇心を持って取り組める時間を共有したいと考える。

VII. おわりに

実習ではA様との関わりを毎日30分継続することや、本人に関心を持っていることを示すことにより、会話の返答が返ってきたり笑顔が見られたりと、プラスの変化が大きくなっていった。利用者が落ち着いて、安楽な生活を実現することが信頼関係を築くことができるという事に繋がることを学んだ。

脳性麻痺について調べて、感覚の受け取り方に偏りがある対象者の一人ひとりのニーズに対応した身体部位の活性化につながる支援を行い、好奇心を持って取り組められるケアの重要性について理解を深めることができた。

今後は、様々な介助場面に視点を置き、実践していきたいと考える。

参考・引用文献

- 1) 穂山富太郎・川口幸義・大城昌平（2015）「脳性麻痺ハンドブック 第2版 一療育にたずさわる人のために」医歯薬出版 p. 211
- 2) 穂山富太郎 第6章療育の具体的アプローチ 遊び（感覚統合の理論と考え方を生かして）
穂山富太郎・川口幸義・大城昌平（2015）「脳性麻痺ハンドブック 第2版 一療育にたずさわる人のために」医歯薬出版、p. 207
- 3) 介護福祉士養成講座編集委員会（2014）「新・介護福祉士養成講座7 生活支援技術Ⅱ」中央法規 p. 2